

第1回燕市農業振興協議会 議事録

日 時:令和4年1月27日(木)

午後1時30分から午後3時

会 場:燕市役所 1階 つばめホール

1. 開 会 (産業振興部長あいさつ)

- 農業をとりまく課題は、コロナ禍による需要の減少、米価の下落、少子化による後継者不足など様々。市では、米と園芸作物の複合経営、販路開拓、若い世代の経営参画促進や意欲ある農業者の支援を行ってきた。
- 今後は、作る視点に加えて売る視点も重要になってくると考えている。農業者以外の商工関係者、販売者、消費者を交えて議論いただき、新たな農業振興のあり方を考えたく、農業振興協議会を立ち上げた。
- 共通認識を持ち、どうやって作ったものを売っていくかを議論し、戦略を立てたいと考えている。多業種が集まる機会は初めてで手探りであるが、委員の皆様から忌憚のないご意見を頂戴したい。

2. 委員の委嘱 (委員委嘱期間、事務局自己紹介)

3. 設立趣旨の説明と協議会の進め方

- (1) 農業振興協議会設置要綱にもとづき設立趣旨を説明
- (2) 本協議会の進め方について説明

4. 燕市の現状について

- (1) 燕市の農業の現状 資料1参照
- (2) 新型コロナウイルス感染症にかかる緊急アンケート調査 資料2参照
- (3) 燕市の農業施策の実施状況 資料3参照
- (4) 広報つばめ9月号「特集つばめの農業」 参考資料参照

5. 意見交換

■事務局

- 振興協議会の進め方の補足として、今年の5月と9月に協議会を行い、その内容を令和5年予算に反映させていきたい。その後も、課題を発見、掘り下げるといった形にしていきたい。
- 委員の取組における課題や、委員からみた燕市の状況、市への提案など意見

交換をお願いしたい。

■生産者

- 農業法人で、米と大豆をメインに生産しているが、今年は米価の下落が大きく収量もよくないため、非常に厳しい状況。今後どうしたものかと考えている。
- 野菜、果樹を生産方法、販売方法を工夫し、加工品を作って経営している。米余りの影響で米価の下落もあり、米だけでは経営していけず、見通しが立たない状況である。
- 稲作、果樹、花苗、養蜂を行っている。面積、販売額とも他委員ほど大きくはないが、消費者が土や自然から様々なことを感じ、考えられる農業をやっていききたい。
- 課題は、米価の下落による収入の減少もあるが、県央地域の人口を考えると、消費者が絶対的に少ない。共働きの家庭、ひとり親家庭が多い中で、冷凍食品や簡単なカット品に流れていくことは容易に想像できる。
- 農産物そのものを使って料理を作る人をどれだけ増やしていくのか。土の恵みの大切さやSDGsに配慮された農業を消費者に伝えるなど、付加価値を付けていくことが重要だと考えている。
- 認定農業者のように安心安全な農業をやっているマークの設定や残留農薬の検査料補助があると気軽に付加価値を高めることができると思う。
- 米を主体として切り花、野菜を栽培。野菜は学校給食に納入している。学校給食納入農家という立場から言うと、給食は子供の数が減っているなので、成長していく販売先ではない。学校給食部会も高齢化が進み、給食に必要な量を作れていない状況がある。
- 中食やテイクアウト、炒めるだけのミールキットなど人気が高く、消費者から農産物が離れている感じがする。加工用農産物の需要は増えているので、うまく加工用に回せば燕市農産物の消費拡大にはつながるのではないかと。

■消費者

- 食生活改善を行っている組織で、地域で料理教室を行い食育に力を入れてきた。子供たちに自分で作らせてみると、苦手な野菜料理でも完食してくれた。そこでベジ足しという、いつもの食事に一品野菜を足すという運動を行ってきた。
- とにかく野菜を食べてもらうように、コロナ禍で帰省できない大学生に物資を送る際、レシピを一緒につけるなど、さらなる地産地消に取り組んでいきたい。
- 燕市はカトラリーなど食の道具の産業が盛んな地域。食器の口当たりで料理の味わいが変わることもあると思うので、製造現場を訪問し、働いている方が食について考える機会を作っていただくよう働きかけたい。

- 飲食店をやりながら食の団体もやっている。コロナで飲食店は打撃を受けていて、昨年1年で全国の飲食店の1割が廃業したという統計がある。業者にも影響があり、どうやって復活していけばいいのか。
- 課題は、もっと横のつながりがあると、付加価値が生み出されると思う。まずは飲食店、農業者、製造者がいろんな話をして、新しいものを考えていく。それができれば新しい何かはおのずと生まれると思う。
- 生産者をやりながら食の団体もやっている。食というテーマで情報発信する団体となって3年。人材育成として、学生や見学受け入れを実施している。
- 食の団体がこの地域にはないので、多くのことを頼まれてやっている。目指すは、農商工会のような任意団体。活動資金がない故にいろんな人に助けて頂いている。
- 課題はプレイヤーがいないこと。学生や行政などサポートに回る人はたくさんいるが、実際にやる人がいない。結果、我々になんでもやってくれということになっている。声をかけても手伝ってくれる人がいない。
- 私立の保育園だが、給食は市の献立と同じものを作って出している。給食は産地をすべて表示しているが、業者の都合か地元のもの少ない感じはする。
- 園では畑をやっており、子供たちも畑が大好きで一緒になってやっている。
- 小売店でも農家の顔が見える野菜を購入する。

■農業関係団体

- 燕市は地場産業と農業を複合的に経営している、兼業農家が多い。その中で後継者不足が最も課題となっている。担い手を増やしていかなければ、農業は維持できない。いかに担い手を育成し、経営所得を向上させていくか、農業で生計が立てられる状況に持っていけるかが重要。
- この地域は園芸作物もあらゆるものをそろえられる土地。我々の販売能力を生かしていければと思っている。
- 需要者として考えると、農業は非常に重要な産業だと思う。農業の現状をみても、20年で担い手が半減し、担い手の耕作面積が上がっているということは、生産性が向上しているのだろう。さらに高めていくために、改善が必要だと考える。
- 会社で若手農業者の直売会を受け入れているが、大量注文には対応できないようだ。お中元やお歳暮の需要は、企業としては結構あると思うので、対応できる農家がいてもいいのかなと思う。
- 家では宅配食材を利用している。セットされた野菜とレシピを地産地消で行えるといいなと思う。素材そのものより加工した方が付加価値は上がると思う。
- 市内でインターンシップのコーディネートをしている。コロナ以降、燕に帰れ

- ない学生たちに支援物資を送る事業を行い、学生の求めるものを考えた。
- 燕にあるものを加工したり、喜ばれる送り方を考えた時に、既存の需要にどうアプローチするかを考えるのは今後の販売のヒントになると思う。
 - フードロスの取組にも、トマトなどはロスが多いと聞いたインターン生が、忙しい農家に代わって販売するしくみを考えた。第三者の意見を聞きながら既存のシステムにどう合わせていくかが重要と考える。
 - 自身も宅配食材を利用している。土のついた野菜が食べたいという思いもあるが、多忙なこともあり家事を簡単に済ませてしまう方法を選びがちである。

■市場・小売関係者

- 現在、新潟県産を食べましょうという取り組みが行われている。県外から品物が来ても、県内産の出荷が始まると、県内産が売れていく。県民は県産品を愛しているといつてよい。
- 生産現場は、高齢化、生産資材の高騰があり、施設園芸は特に苦勞されている。単価が上がったとしても、生産者の収入にプラスになる状況にはなっていない。
- 米価下落はまだ続くと思われるので、園芸への転換を進めていく必要がある。まずは、現在頑張っている取組を支援し、成功事例を作って収益を上げていただくことで新規就農者を取り込むのが良いのではないか。
- 今まで以上に燕市とともに食育、地域振興の推進に力を入れていきたい。青果、水産、その他食料品、近隣の施設と一体になって地域を盛り上げていきたい。
- 生産者と小売店では認識のギャップがあるような気がする。地場産農産物は毎日完売していて、生産者にはもっと持ってきて欲しいくらい。消費者は産地にこだわりがあるようで、「新潟県産」と「新潟県燕市産」が出た時は、燕市産が先に売れる。産地をアピールするだけで武器になると考える。
- 昨年、食べて応援キャンペーンに参加した。期間を設けるのではなく、生産者が安心して作れるように、それぞれの旬ごとに作物を決めて実施したらどうか。
- コロナの影響は、食料品の販売は伸びたが、衣料品とか、テナントの飲食などは打撃を受けている。燕市が農業の課題を解決するということで、協力になることがあるのではと考えた。
- 現在、三条市産は扱っているが、燕市産は扱いがほぼない。昨年初めて飛燕舞を仕入れキャンペーンに参加した。市内の生産者に当店で販売するメリットを知ってもらい、販路拡大につなげていただければと考えている。
- 農産物直売所を運営している。農家の契約者数は200～300名、入客数は500～800人/日。同じ時期に同じ農産物を持ってくる人が多く、売り場に同じ商品が溢れたため、翌年から時期をずらすことを農家をお願いしたら、ずらした農家の売上が昨年対比で大きく伸びた。生産者もロスが減り、消費者も長期間商

品を買うことができる様になった。

- 若い農家が少ない現状を聞き取りしたところ「作っても売れない」「稼げないから違う仕事をしないといけない」という声があったが「この生産者の農産物が買いたい」と足を運ぶお客様も多くいる。単価を下げることなく売れるのが一番良いので、時期をずらすというのは重要なことだと考える。

■福祉団体関係者

- 異業種の方々が参加される会は貴重な機会ではないかと思っており、非常に期待している。横のつながりというキーワードが出た。1年後、何かしらビジョンを出せるよう今後も協力したい。
- 農福連携を模索した結果、昨年5月から水耕栽培を開始した。レタス、ルッコラなどの葉物、ニンニクスプラウト、エディブルフラワーなどを栽培している。障がいを持つ方の雇用場を創出しながら、生産者としてもやっていきたい。

■行政機関

- 県の農業振興において重点項目の1つが「園芸振興」。園芸生産のすそ野を広げる取り組みを進めている。もちろん県の主要品目は米ではあるので、米価の下落などは今後も課題となってくる。
- 燕市の農業は、基盤整備が進んだ広い田んぼで水田農業がおこなわれているという認識だったが、実は園芸作物の歴史ある産地でもあると知った。今後も産地の維持発展を支援していきたい。

6. 閉 会